

# 四代目妻の果物語(見玉照子)

昭和20年終戦。

戦地満州から帰国した四代目政藤は、地元駅の駅に降り着き、初めて実父の死亡を聞かされます。

その時、政藤26歳。

六人兄弟の長男として一家を支えるため、毎日みかん山で汗を流す日々が続きます。

その二年後、照子が22歳で観音山に嫁入り。

二人で力を合わせ、下の兄弟5人の新宅(2軒)、婿入り(2軒)、嫁入り(1軒)を無事済ませます。戦後の苦しい中、頼る親もいない中で、毎日が必死の連続だったそうです。

照子は、夜が明ける前から起き、薪でご飯を炊き、朝食とお昼に山で食べるお弁当をこしらえ、今では車で5分の道のりを牛を引ながら片道約1時間かけて山に行き、収穫作業をして、そして収穫したみかんを牛に担がせまた1時間かけて家路に着き、夕食の支度をして、夜なべで出荷作業をして、働き通しの毎日でした。

家族旅行も一度だけ県内の白浜温泉に家族で行った思い出だけで

## 昭和40年代



その旅行も、前の大型トラックで見えなかったために信号無視で捕まってしまった苦い記憶しかないようです。大雨による山崩



## 昭和30年代

れや、台風による園地の被害など、様々な苦労を経験し、特に台風の日は今でも園地が心配で、生きた心地がしないそうです。

そんな照子も、今年で御年88歳となりました。

なんと！まだミツシヨンの車を運転して、日々のおかずを購入入りにスーパーに向かいます。

元気の秘訣は、地元のコーラス倶楽部と自宅近くの家庭菜園での野菜作りと日々の家事、そしてパンフレット組み作業です。やはり人間仕事がありますと生活にメリハリが出ますね。若い頃から働き通しだったためか、じっとしているのが苦手です。に身体を動かしています。

これは、(今後)も地には、(今後)も地に

足を付けて、着実に仕事をしたいってもらいた

い)とのことですよ。

四代目妻の言葉を胸に、日々着実に仕事を行い、未来に繋がります。

後ろには観音山



家庭菜園を耕す四代目妻